

サークル・ウォッチング

東洋大学
スポーツ新聞
編集部

『東洋魂』はわたしたちが創ります！！

<http://sports-toyo.hp.infoseek.co.jp/>

東洋大生が発信する唯一のスポーツ紙が「スポーツ東洋」だ。昨年春の創刊以来4号を発行し、今年正月の箱根駅伝では号外も配布。大会で活躍した選手たちの勇姿を同紙で読んだ人も多かったのでは？

すべては吉本帆住さんと井上香織さん（ともに社会文化システム3年）の「スポーツ新聞を自分たちの手で！」という熱意から始まった。当時、学内にスポーツ新聞部はなく、「ないのなら自分たちで作ってしまおう！」と2001年11月に編集部を立ち上げた。しかし、一体どこから始めたらいいのか……。そんな折、二人の共通の友人が大学野球を見に行った帰りに飲食店で偶然他大学のスポーツ新聞部の人たちと居合わせた。「これ幸い！」

と吉本さんたちは持ち前の行動力を発揮して彼らから新聞づくりのノウハウを聞き出すことに成功。手探りで新聞づくりをはじめた。

取材・編集をはじめ、レイアウトも自分たちで行う。いまでは門前仲町にある某大手スポーツ新聞社の印刷所が部室わりだ。メンバーは11人に増えた。

スポーツのイベントがあれば全国どこへでも駆け付ける。今年の冬はホッケーの大会を取材するため苫小牧まで出向いた。「寝台車でガタゴト揺られて行きましたよ。好きだから何でも出来てしまう。私たちの新聞を読んで選手やその家族が喜んでくれるのがすごくうれしい！」と屈託なく笑う井上さんだ。

いまひとつ盛り上がり欠けるとされ



る大学スポーツだが、メンバーは「学生だからこそ盛り上がるものがある」「プロじゃないからこそいい」と口々にその魅力について語る。

学内での認知度が増すにつれ、広告収入も多少入るようになった。また、これまでの取材活動を通じ、いまでは体育会系のクラブの部員たちから寄せられる信頼も厚い。「やればできることを実感しています」。吉本さんはここまでの道のりを振り返って感慨深げだ。

「東洋大はおとなしく見られがちですが、がんばってる人がいっぱいいるんですから！」同サークルでは東洋大のスポーツをとともに盛り上げていくスポンサー、記者を大募集中。我こそは、と思う方はぜひ編集部の扉を叩いてほしい。

工学部
放送技術研究会
(HGK)

機材にこだわり。退屈させない番組づくりを

川越キャンパスの文化系サークルでは草分け的存在の工学部放送技術研究会(HGK)。今年で創立43年目を迎えた。

年3回の番組発表会とケーブルテレビ向けの番組制作が主な活動だ。夏には撮影の練習合宿、冬はスキー合宿を行い、部員同士の親睦を深めている。11月の工学祭での発表が一年の活動の集大成となる。

地元川越ケーブルテレビでひと月1回不定期に放送している30分番組、『謎のスパイス』は今年で9年目に入った。月ごとに生活に役に立つテーマを決め、大妻女子大学放送研究会と共同で制作している。

新入生を加えた今年のHGKメンバーは総勢11名。授業で忙しい工学部学生のこと、曜日を決めて全員が揃うのは難

しく、ふだんは「授業が終わったメンバーで毎日集まって少しずつ練習しています」と会長の凶子誠君(機械工2年)。

練習は技術班、CM(企画)班、立看班の3班に分かれて行っている。技術班では各種機材を駆使して、作画能力の向上、録音・録画・編集技術の向上を目指している。「地元の川越ケーブルテレビのおかげりや代々先輩たちからの寄贈があって、とても助かっています」と凶子君。もともと「機材に興味があって入部した」というだけあって言葉の端々に機材に対するこだわりが感じられる。

一方、企画班では日常的にネタ探しをして番組を構成したり、トークのレベルアップに取り組んでいる。ドラマ、クイ



ズ、バラエティ、DJ番組と扱うジャンルも幅広い。CM班チーフの野辺伸泰君(コンピュ2年)は、「自分で企画するのがとても楽しい。イベント終了後に観た人から『よかったね』という声を聞くと、とても励みになります」と語る。

卒業後はテレビ局などで番組制作スタッフとして活躍するOBも多いという。

川越キャンパスで行われる文化系サークルのイベント、文化祭典での発表を終えたいま、6日に練馬・石神井公園で行われる野外イベント、『ハローサンデーパーク』の準備に忙しい毎日。凶子君は「ふらりと立ち寄った人たちを飽きさせないような、面白いもの番組を作りたいですね」と番組づくりの抱負を語った。